

# リカードウにおける資本蓄積と労働生産力

遠 藤 哲 広

“Ricardo on Capital Accumulation and Productive Power of Labour”

Tetsuhiro Endou

## 1. はじめに

リカードウの理論体系はまず、三階級三分配分論として捉えられ、さらに新しい研究者らによって資本蓄積論と捉える解釈が提示された。

中村廣治氏は言う。

「リカードウ体系は、価値論にもとづく三階級・三分配分論の静態および動態分析として捉えられるのが通例である。このほとんど定説とも目すべきリカードウ把握にたいして、吉澤芳樹・羽鳥卓也・富塚良三氏は、それぞれこれを資本蓄積論の体系として把握する注目すべき成果を提示された。本書はこの分析視角をリカードウ体系の生成過程のうちから実証することにつとめ、それが、すぐれて、資本蓄積の誘因たる一般的利潤率・資本蓄積のファンドたる利潤の確定を目的とする理論体系としてとらえられるべきゆえんをあきらかにするものである。この意味において、リカードウ体系は、利潤という分配範疇の規定を焦点とする再生産＝蓄積の体系として特徴づけられるであろう。」<sup>(1)</sup>

あるいは、羽鳥卓也氏は言う。

「リカードウの主著『経済学および課税の原理』に展開されている経済学の体系は、資本の蓄積が賃銀労働者・資本家・地主の三階級の間への富の分配関係に対していかなる影響を及ぼすか、またそれによって生ずる所得諸範疇の変動が逆にその後の資本蓄積の進展に対してどのように反作用するかといった問題を解明することに中心課題を見出していた。」<sup>(2)</sup>

ここで問題としたいのは、リカードウにおけるその資本蓄積の内容である。というのは、リカードウは資本蓄積＝資本増大の方法を二つ提示しているからである。たとえば、賃金論の章で、リカードウは次のように言う。

「資本は、一国の富のうち生産に使用される部分に他ならない。そして、労働を実行するのに必要な食物、衣服、道具、原料、機械、等から成っている。

資本は、その価値が増加すると同時に分量が増加することもある。一国の食物と衣服に対する追加が行われると同時に、その追加量を生産するのに以前よりも多くの労働が必要とされることもある。その場合には、資本の分量が増加するだけでなく、価値も増加するだろう。

あるいは、資本は、その価値が増加することなく、場合によっては、その価値が実際に減少している間に、その分量が増加することもある。単に一国の食物と衣服に対する追加が行われ

るだけでなく、その追加が機械の助力によって行なわれることもあろう。その場合、それらの物を生産するのに要する比例的労働量は少しも増大することなく、絶対的に減少する場合すらある。資本の全合計も、またどの一部分も、以前より大きな価値を持つことなく、実際には価値が減少しているのに、資本の分量が増加することもある。」<sup>(3)</sup>(下線引用者、以下同様)

そして幾らか前提条件を変えつつも、第7章・外国貿易論ならびに第20章・「価値と富について」など、『原理』で何度か同じタイプの議論が散見されるのである。基本となる賃金論の章では、上記で見たように、リカードウは、資本を増大させるには二つの方法があり、この二つの方法によって資本が増大し、蓄積元本が生成される、というように考えていた。そこで、第一に生産的労働者の増大、それにもとづく劣等地耕作の進展による穀物価格の騰貴、それゆえ資本の分量のみならず価値の騰貴する事態を想定している。第二は労働生産力の上昇。それゆえ資本は価値が減少している時に分量が増大する。資本価値減少は、新生産方法による商品価値減少が既存の商品(=資本)にまで波及するからである。

つまり、賃金論の章における資本増大の二つの方法とは、第一に生産的労働者の増大によるもの、第二に労働生産力の上昇によるものなのである。

後に詳しく検証するが、外国貿易論の章でも二つの資本蓄積方法が示される。第一の方法は収入の増加による蓄積元本の増大=外国の安い穀物の輸入による賃金率低下=利潤率騰貴にもとづく生産的労働者の雇用、第二は労働生産力の全般的な改善による消費の物的不変・価値的削減にもとづく蓄積である。つまり、賃金論の章と外国貿易論の章では、基本的に同じ議論が展開されており、資本増大=資本蓄積には、二つの方法があり、第一の方法が生産的労働者の増大であり、第二の方法が労働生産力の増大であることがリカードウによって説明されている。

それゆえ、本稿で問題とするのは、第一の方法と第二の方法との相互関係なのである。現実の資本蓄積過程では、両者は個々バラバラに進展するのではなく、密接に関連しながら、進展するものとリカードウは考えていたはずだからである。その確たる証拠は、従来まったく引用されてこなかったが、価値論の章にある。

ところが、従来の解釈は、リカードウにおける資本蓄積の第一の方法に偏りすぎていたように思われる。そこでは、資本蓄積とは不生産的労働者の生産的労働者への転化による生産的労働者の増大、あるいはよりリカードウ資本蓄積論の体系にとって本質的には、——ということとは、人口増大=劣等地耕作の進展との関連が明確になる議論という意味だが——未成年が成人になることによる生産的労働者の増大、つまり未成年が成人になり労働者として家族をやしなう賃金が支給されるようになると、家庭の喜びは大きいから人口増大が起き食料需要の増大は劣等地耕作を進展させ、穀物価格の騰貴を生み、地代を増大させるが、同時に賃金を上昇させることで利潤を減少させ、ひいては利潤率を下落させるので、資本蓄積が滞り、経済の発展はブレーキをかけられる。そうならないために政策として必要なのは海外からの安い穀物の輸入であった。その議論自体は、リカードウの時論に対する明確なポジションを示し、資本蓄積論としての最重要な議論の一つなのは間違いない。

しかし、それでリカードウ資本蓄積論に関する問題が全て解決したのではない。なぜなら、リカードウ自身は第二の方法での蓄積こそ、より望ましいと再三明言しているのであり、そこには看過できない問題が潜んでいるはずだからである。第二の方法とは、労働生産力の全般的な改善であり、それにもとづく資本の増大が蓄積元本を生み出す、という議論である。もしかする

と、この第二の方法がまじめに取り上げられてこなかったのは、たとえば、リカード研究者らが次のように考えているためかもしれない。すなわち、生産力の増大を生み出す技術革新は外生的なものである。リカードは経済学の原理として、資本蓄積の進行による分配分の変化を内生的に迫っていき、それが一国民経済にどのような影響を与えて行くのか、それを問題としているのであり、経済システムの埒外の外生的なものである技術革新は確かに望ましいとしても、『経済学原理』の対象とはなり得ない。一国民経済にとって重要なのは論を待たないが、外生的条件であるがゆえに排除したのだと。

しかし、筆者はそう考えることに疑問を持つ。なぜなら、リカードが問題とする生産力の増大＝資本の増大＝蓄積元本の生成は、全般的＝社会的なものだからである。この全般的・社会的生産力の改善は、内生的条件の整備なしには起こり得ない事であり、その条件の整備によってどの程度、外生的技術革新が進むかは規定できないが、蓋然的には市場の拡大、資本の再編によって、社会的生産力の改善が生まれるものと考えられるのである。つまり、リカードは資本主義経済発展のヴィジョンとして、一定の資本蓄積を前提としての市場を通しての、資本の再編＝社会的分業の進展ということに労働生産力の社会的改善というストーリーを見ていた、ということができる。

本稿執筆の動機はそのあたりの事情を明確にする事である。

## II. 資本価値の増大

第7章外国貿易論で、リカードは、資本蓄積の方法は2つあるという。

「資本が蓄積されうる方法は2つある。それは収入の増大か、消費の減少か、どちらかの結果として貯蓄されうる。もしも私の支出が引き続き同じであるのに、私の利潤が1000ポンドから1200ポンドに引き上げられるならば、私は以前よりも年々 200ポンド多くを蓄積する。もしも私の利潤が引き続き同じであるのに、私が支出の中から200ポンドを貯蓄するならば、同じ効果が生み出されるだろう。…利潤が20%から40%に引き上げられたとき…彼はその資本に対する20%の利潤のかわりに、40%の利潤を獲得するだろう。だが、もしも彼の収入の支出対象であった全商品が安くなったため、彼および他の消費者が以前支出していた1000ポンドごとに、その中から200ポンドの価値を貯蓄できるとすれば、彼らは一層効果的にその国の真の富を増加させるであろう。一方の場合には、貯蓄は収入の増加の結果として行われ、他方の場合には、支出の減少の結果として行われるであろう。」

もしも、機械の採用によって、収入の支出対象であった商品の大部分の価値が20%下落するならば、私は私の収入が20%引き上げられた場合と同じく効果的に貯蓄することができるだろう。」<sup>(4)</sup>

リカードによると、資本蓄積には二つの方法がある。収入の増大と、消費の削減である。第一の収入増大の前提は、利潤率の騰貴であった。ここでは、リカードは安い外国産穀物の輸入（あるいは、農業における技術革新）によって、賃金率が下がり、利潤の増大かつ利潤率の上昇により、蓄積元本が増え、蓄積を増大させることを念頭においている。

第二の方法は全般的生産力の増大である。

「もしも彼の収入の支出対象であった全商品が安くなったため」

あるいは

「収入の支出対象であった商品の大部分の…下落」

という文章から明らかなが、一産業部門ではなく、これは労働生産力の社会的改善である。すなわち、従来消費していたすべて、あるいは大多数の商品について物的数量がより少ない価値でまかなえるので、消費の価値的減少によって蓄積元本を捻出する方法である。

重要なのは、リカードウの政策論的主張の眼目である自由貿易にもとづく安い外国産穀物の輸入、それゆえ利潤の増大＝利潤率の上昇にもとづく資本蓄積である第一の方法よりも、第二の方法こそ、望ましいと考えていることである。

同様の議論を実は「第20章価値と富、両者を区別する特性」でも、明示的にリカードウは述べている。ここでは、リカードウは富を増大させる二つの方法を論じている。リカードウにとっての資本は「一国の富のうち生産に使用される部分であって、富と同じ方法で増加させることができる」のであるから、この章で論じている富を増大させる二つの方法は実質的には、資本を増大させる二つの方法と同じ議論である。この章における富(資本)を増大させる第一の方法は、外国貿易の章と同じく、収入からの蓄積である。第二の方法は、労働生産力の全般的な改善である。なぜ第二の方法が取られるべきか、リカードウは言う。

「後者の方法が選好されなければならない。なぜなら、この方法は、第一の方法に伴わざるを得ない享楽品の欠乏や減少を引き起こさずに同一の効果を生ずるからである。」<sup>(6)</sup>

第一の方法と第二の方法では、なにが違ってくるのか見てみよう。

第一の方法による資本の増大とは、収入からの蓄積であった。自由貿易により、外国産の安い穀物が国内に入り、賃金率の下落が利潤の増大、さらには利潤率の上昇を引き起こす訳であった。このとき、蓄積により資本価値増大、輸入された安い穀物により労働の自然価格下落、となっている。つまり、労働の自然価格<労働の市場価格である。労働者は豊かな生活を手にするだろうか。答は、NOである。なぜなら、「享楽品」の生産量は不変なので、労働者は自然価格以上の賃金を受け取ったとしても、もう一方の階級である資本家の享楽品に対する需要も不変なので、享楽品の価格が上昇してしまい、資金に余裕のない労働者は享楽品を消費できないか、あるいはできたとしても非常にわずかなものとなることだろう。

ところで、第二の方法による労働生産力の全般的改善にもとづく資本の増大ではどうなるのか。まず、資本家の消費の削減にもとづく資本価値増大、生産力の社会的上昇にもとづく労働の自然価格下落、それゆえ労働の自然価格<労働の市場価格となっている。このとき、労働者階級は享楽品を手に入れることができるだろうか。答は、YESである。生産力の社会的上昇によって、享楽品の物量は増大している。資本家は価値が減少した享楽品を以前と同じ数量消費するが、それ以上ではない。享楽品の購入から浮いた価値は蓄積にまわしたからである。それゆえ、自然価格以上の賃金を手にする労働者階級は、このとき享楽品を手に入れることができるようになるのである。したがって、「第二の方法が選好されるべきである」とリカードウは言う。

この「選好されるべき」というリカードウ自身の言い方は、賃金論における次の議論を思い起こさせる。なぜなら、あるべき理想をリカードウは次のように言うからである。

「人類の友が願わないではいられないのは、すべての国で労働階級が安楽品や享楽品に対する嗜好を持ち、それらのものを入手しようとする彼らの努力があらゆる合法的手段によって刺激されることである。過剰人口を防ぐには、これにまさる保障はあり得ない。労働者階級が最小の欲望しか持たず、最も安い食物で満足している国々では、人民は最も酷い浮沈と困窮にさらさ

れている。彼らには災難からの避難所がない。彼らは一段と低い地位の中に安全を求めることができない。彼らの地位はすでに非常に低いので、もうそれ以下に落ちるわけにいかない。彼らの主要な生活物資がどれほど不足した場合でも、彼らの利用できる代替品はほとんどない。そこで、彼らにとっての欠乏は飢饉から生じるほとんどすべての害悪をとまなうのである。」<sup>(6)</sup>

以上から、リカードが第二の方法、全般的労働生産力の上昇を、外国産穀物の輸入よりも、望ましい結果を生むと考えていたことが明確になったと言えよう。

ただ、反論が考えられる。全般的、それゆえ社会的生産力の上昇など仮設的な議論として、提示されたにすぎないとも考えることもできるからである。しかし、そうではない。リカードにとって、資本蓄積との関連で提示される社会的生産力の全般的上昇は仮設的なものではなく、資本主義発展の一つのプロセスなのである。

「資本は、一国の富(＝ウエルス)のうちの将来の生産のために使用される部分であって、富(＝ウエルス)と同じ方法で増加させることができる。追加資本は、それが熟練および機械の改善から得られようと(＝第二の方法による資本蓄積)、より多くの収入を再生産のために使用する(＝第一の方法による資本蓄積)ことから得られようと、同じように将来の富＝ウエルスの生産において有効であろう。」<sup>(7)</sup>(カッコ内引用者)

ここでは、先に明らかにしたことだが、資本蓄積は第一の方法である生産的労働者の増加によるよりも、第二の方法である社会的生産力の全般的上昇による方が、望ましいことが明言されている。

では、リカードにおける社会的生産力の全般的上昇とは、何を意味するのか考える必要があるだろう。そこで注目するのは、上記引用文中の傍線部分であり、追加資本が「熟練および機械の改善」から得られるという文章である。これは明かに、スミスの分業論におけるある文章を想起せしめる。すなわち、

「労働の生産諸力における最大の改善が行われるのは…分業の結果である。」<sup>(8)</sup>

という主張であり、さらには、分業がなぜ、生産諸力を向上させるのか、スミスは言う。

「分業の結果として、同一人数の人々がなす仕事がこのように大増加するのは、三つの異なる事情、第1に…職人の技巧の増進、第2に…時間の節約、第3に…多数の機械の発明に由来する。」<sup>(9)</sup>

リカードは上記の文章を記すとき、スミスの分業論を念頭においていたことはまず、まちがいないと思われる。ということは、リカードが資本増大の第二の方法として推奨している労働生産諸力の改善とは、それゆえ分業のことだといえるのである。個別一産業部門における生産力の改善よりもむしろ、社会的分業の推進が各産業の再編を促し、とりわけ生産財産を確立するなかで、「熟練」が増進し、「多くの機械が発明され」改善され、社会的規模での労働生産力の改善が生まれる。それがもっとも望ましい資本蓄積元本の生成であるとリカードは考えていたのである。

### III. 資本蓄積と労働生産力

次に価値論の章における議論に注目したい。リカードは価値論では、スミスを批判し、資本蓄積後の社会でも、労働価値論の貫徹を証明したいと考えていた。それゆえ、商品価値はそれを生産するのに投下された労働量によって規定され、労働力の価値はそれを再生産するのに必要

とされる諸商品の生産に要する労働量によって規定されるから、利潤は賃金の低下による以外騰貴し得ない、ということがリカードウの証明したかったことである。では、いかにして、リカードウはそれを証明するか。

まず、スミスの言う初期未開社会から話をはじめ。そこではリカードウはすでに資本(=道具)が存在したと述べ、資本導入後も労働価値論は貫徹することを述べて行く。そうして、次にもつぱら道具を生産する部門が生まれた状態、さらには「社会の職業の範囲が拡大」された状態、そして「一層進歩が遂げられ、技術と商業が繁栄している状態」を示している。それらのもとでも、商品の価値はその生産に直接間接に要した労働量であることが説明される。すなわち、社会の発展した状態でも、諸商品の価値は分業されたさまざまな労働の合計になっているにすぎない。逆に言えば、一人一人が個々別々に分離して労働することではなくて、労働が分割されかつ市場を通して結合されることによって、つまり社会的分業によって社会は大きく繁栄すると捉えられている。

こうして、リカードウは社会の発展を分業の進展と捉える。その分業は社会的分業である。分業の進展が労働生産力を上昇させて行く。そのとき、商品は分業労働の産物であり、その分業が進めば進むほど、生産力は上昇しているのである。リカードウが見るのは一貫して、この社会的分業にもとづく労働生産力の上昇であり、それにもとづく社会の発展である。もちろん、その社会的分業が進展するには、その前提として、それぞれの発展段階に対応した資本の蓄積が不可欠であり、それが市場を通して再編されることで、社会的分業が生まれ、とりわけ生産財生産部門が確立し、労働生産力が全般的に改善されて行く。

リカードウはそこを労働生産力の発展として単線的に見るので、換言すれば質的な転化を考えないので、社会的分業が進み社会が繁栄し、さまざまな産業部門が生まれ、流動資本と固定資本の比率についてさまざまな状態が生まれれば、投下労働価値論にもとづく賃金・利潤相反論はその証明に苦戦することにもなる。

リカードウは第1章3節で、資本蓄積によって、職業分化がどう進むか、論じているので、その議論を一つ一つ見てみよう。

### ①「初期未開社会」

ここでは、スミスが『国富論』第1篇第6章で規定した「初期未開社会」と同じように、リカードウの「初期未開社会」においても、資本・賃労働という階級分割はなく労働全収の状態である。ただし、スミスとリカードウの両者の「初期未開社会」には、違いもある。リカードウの「初期未開社会」では、資本=道具は存在するからである。「アダムスミスが言及しているかの初期状態においても、獵師が彼の獵獣を仕留める事を可能にするためには、多分彼自身によって作られ蓄積されたものであるが、若干の資本が必要だろう。」<sup>(10)</sup>

また、この社会状態は、1821年7月4日付けトラワ宛て書簡によって、さらにその内容を知る事ができる。

「もし商品の交換ということがなければ、商品が価値を持つ事はありません、と君はおっしゃる。もし、交換価値の事を言っておられるとすれば、私も賛成です。しかし、もし、私が一着の上着を作るのに丸一ヶ月の労働を費やさねばならないと、他方一個の帽子を作るのにはわずかに一週間の労働で足りるとすれば、私がそのどちらも決して交換しないとしても、上着は帽子の

4倍の価値を持っているでしょう。それでも泥棒が私の家に入って、私の財産の一部を盗むとすれば、私は彼が一着の上着よりも、むしろ3個の帽子を持って行くことを望むでしょう。商品の価値が極めて固な仕方でその商品の生産に必要な労働量によって評価されるのは、社会の初期段階の交換がほとんど行われていない時で、これはアダムスミスが述べたとおりです。」  
(11)

上記に見られるように、リカードウは「初期未開社会」では交換がほとんど行なわれておらず、自給が主で、剰余生産物が市場で交換されるに過ぎない状態と考えている。つまり、「初期未開社会」は、交換の未発達な状態であり、市場の大きさがごく限定的な状態である。

しかし、そんな状態・社会の中からも、資本(=生産財)の蓄積が徐々に生まれるだろう。

#### ②生産財生産が独立した状態

リカードウはこの状態を「ビーヴァと鹿を仕留めるのに必要なすべての器具は一つの階級の人々に属し、そしてこれらの動物の捕獲に使用される労働は他の階級によって提供されることがあるだろう」<sup>(12)</sup>と述べる。道具(生産財)=資本による労働生産力の発展は、資本の蓄積を可能ならしめる。もし仮に、道具の自家生産が10時間を必要とし、生産財部門における道具の生産が5時間を必要とするにすぎないなら、自家生産は止み、その分生産財生産部門で生産される道具を購入することになる。道具を自家生産していた資本、つまり道具を自家生産するための労働者を雇用していた生活必需品ならびに便宜品はこの部門では必要なくなる。一方、道具の購入が増大したため、生産財生産部門は資本を拡大する必要から、それら労働者の一部あるいはすべてを生産財生産部門で新たに雇用することになる。この部門で雇用されなかった労働者は、彼らを雇用した資本自体(=生活必需品ならびの便宜品)は存在しており、またかつて道具を自家生産していた部門は道具を作るより安く道具を購入可能になりその分収入が浮くので消費か、蓄積を増大させるので、どこか他の部門で雇用されるとリカードウは考える。すなわち、資本は利潤率が一定であってさえ、自家生産より生産性の高い生産財生産部門が確立すれば、自家生産から生産財生産部門その他へ資本が移動する。こうして市場を通して、資本が再編成されるのである。つまり、生産財産業の確立は、市場を通して資本を再編成し、社会的分業を推進することにより、生産力を飛躍的に上昇させるのである。

#### ③「社会の職業の範囲が拡大」された状態

さらなる資本の蓄積を前提に、社会的分業が進み、「ある者は漁労に必要な丸木舟と釣り道具を供給し、他の者は種子と農業ではじめて使用される粗末な機械を供給」<sup>(13)</sup>し、職業範囲が拡大する。この社会的分業は市場を通して資本を再編成し、生産力を大きく上昇させるだろう。

#### ④「一層の進歩が遂げられ、技術と商業が繁栄している社会状態」

「一層の進歩が成し遂げられ」ということは資本蓄積がさらに進展しということであり、その蓄積が一定程度の高さになると、「技術」と「商業」が繁栄し、市場は拡大している。ここでは、社会的分業が進展しており、生産力は飛躍的に上昇しており、社会は繁栄している。そのような状態では、市場の拡大=社会的分業の進展に基づき、さまざまな労働が広範に結合されている。靴下を考えてみても、「原綿を栽培する土地を耕作するのに必要な労働」があり、「綿花を靴下の製造国へ運搬する労働」があり、そのなかには「綿花を運搬する船舶の建造に投下された労働」の一部が含まれる。さらに「紡績工と織布工の労働」がある。また、「靴下の製造を補助する建物や機械を建造した技師、鍛冶工および大工の労働の一部」がある。そして「小売商」その他もろもろ

の労働が社会的に結合されている。

資本蓄積が一定の高さに達すると、市場を通しての資本の再編＝社会的分業が進展しそのため「技術が…繁栄し」労働生産力が全般的に上昇して、「商業」＝市場が大きく拡大している。つまり、このような社会的分業の進展は靴下のみならず、あらゆる部門で市場を通しての資本の再編＝社会的分業を生み出し、それぞれの技術や熟練が相互に影響し合い、生産力を全般的に上昇させる。あるいはまた、社会的分業の進展は生産財生産部門を確立し、たとえば船などの運搬手段、鉄などの素材、エネルギー、他方面にその技術が応用可能な機械などを専門に生産する部門を生み出し、この部門の生産性の上昇は、社会全体に影響を及ぼす。つまり、社会的生産力の全般的上昇である。

利潤率が一定の高さにありさえすれば、資本蓄積はさらに進展して、市場の拡大と社会的分業の拡大・深化が生まれ、労働生産力は飛躍的に向上し、商品経済は拡大される。社会的生産力の全般的な改善によって、商品の豊富は労働大衆まで浸透する。商品経済の発展＝豊かさの深化・浸透とともにその無制限の拡大をリカードウは考える。

潜在欲求の無限を前提にして。

「ある人々はもしもぶどう酒を取得する能力を持つならば、そのより多量を消費するであろう。ぶどう酒を十分に持っている他の人々は彼らの家具の分量を増加させるか、あるいはその品質を改善したいと思うであろう。他の人々は彼らの庭園を飾るか、あるいは彼らの住宅を広げたいと思うかもしれない。これらすべてをあるいはその若干を実行したいという願望は、あらゆる人の胸中に植えつけられている。必要なのはただ資力だけである。そしてこの資力を与えることができるのは、ただ生産の増加だけである。もしも私が食物と必需品を自由になしうるならば、私はまもなく、私にもっとも役立つか、あるいはもっとも望ましいものの若干を所有させてくれる労働者に事欠かなくなるであろう。」<sup>(14)</sup>

商品経済の発展はこの「願望」実現のプロセスである。広い住宅、高級家具、庭園、ぶどう酒、絹製品、ピロード、その他もろもろの物質に対する人間の願望には限界がない、とりカードウはみる。必要なのは、その物質を作りだすために必要な資力だけである。この資力は、労働と資本からなる。潜在願望は無限だが、資力が足りない。商品経済の発展＝資本蓄積と社会的分業の進展は市場の拡大＝豊富な商品を実現して来た。「人間の胃の腑を満たす」のには、「一定の資本量で充分である」が、人間は奢侈を追い求めて、物質的豊かさを享受するため進んで行く。そして、それは非難されるべきではなく、「あらゆる合法的手段によって」さえ推奨されるべきことであるし、慣習は変化して行き、ある時点での奢侈も生活必需品になって行く。

また、生活必需品とは異なり、ある時点での享樂品は「浮沈と困窮…からの避難所」として捉えられており、生活状態の悪化はこれら享樂品の消費を制限することになり、労働者の境遇は以前より下がるとはいえ、家族を養うに必要な生活必需品と慣習から必要になっている便宜品はまちががなく入手可能なのである。

#### ⑤富源の終焉

「退歩的狀態は常に社会の不自然な狀態である。人間は青年から成長して壮年になり、ついで老衰して死亡する。しかし、諸国民の歩みはこのようなものではない。なるほど、ひとたび最大の活力ある状態に到達した時には、それ以上の進歩ははばまれるだろうが、しかし、幾世代にもわたってその自然的傾向はその富と人口を減らさずに維持してゆくだろう。」<sup>(15)</sup>



商品経済の発展＝人間の物質的欲望の成就、その先に「富源の終焉」がある。リカードによれば、「富源の終焉」が豊かな社会と捉えられていることが、上記の引用から分かるだろう。人間の胸中にある願望の成就を果して来た社会ではあっても、リカードはそれは健全な発展に過ぎず、「富源の終焉」＝自然の限界は造物主が設定した限界であるから、人間がそれ以上の発展を望むことは不可能であるが、到達した発展の豊かさは「幾世代にもわたって、その自然的傾向はその富と人口を減らさずに維持してゆくだろう」と断言するほどに、リカードは社会における物質文明の追求の健全さに自信を持っていた。

以上まとめると、資本増加の2つの方法として、生産的労働の増加と労働生産力の上昇という2つの方法をリカードは指定した。それらは理論的には区別される2つの方法だが、現実の社会発展のプロセスでは相互に関連し合い、社会を豊かにして行く原動力となるのであった。資本蓄積が進展して社会的分業が進み、生産財産が広範に確立し発展した社会は「大製造業国」となり、「大資本が機械に投下されている富裕で強力な国々」となるのである。

それは富源の終焉まで続くが、利潤率の低下により、資本蓄積の進展そのものが阻まれると、市場を通しての資本の再編もまた、終焉を迎え、新たな社会的分業が生まれる余地がなくなる。社会的分業によって細分化された各産業の中での技術革新は散発的には生まれるかもしれないが、職業分化として生産財産が確立して社会的な生産力の全般的改善を促すような市場全体を巻き込む革新は消える。

こうして、発展を続けてきた資本主義社会は生産的労働者の増加を阻まれるのみならず、社会的労働生産性の向上への道も阻まれ、それ以上の発展は得られない、定常状態に陥るのである。

#### IV. おわりに

スミスは国富論の序論で、一国の豊かさの原因を2つあげ、第一に労働生産力の改善、第二に生産的労働者の割合をあげ、第一の労働生産力の改善こそ一国の豊かさにとって最重要であることを述べ、それを第1篇の主題としている。そこでは、労働生産諸力の改善は、分業によってもたらされることが述べられる。第二の生産的労働者の割合については、第2編の資本蓄積論で扱われる。

スミスは分業論において、農業より工業の方が分業に適しており、生産性の向上は工業の方が有利であると述べる。ところが、資本蓄積論を扱う第2編では、農業投資が最も有利であると述べ、スミスは分業論と資本蓄積論では分裂していると言わざるを得ない。

リカードはスミス資本蓄積論を批判し、投下労働価値論にもとづき、地代の本質を分析し、地代が蓄積元本たりえないことを明らかにした。そうして蓄積動機を利潤率として一般化し、農業投資の優位性を否定した。<sup>(16)</sup> ここにおいて、リカードは資本蓄積元本としての利潤と、蓄積動機としての利潤率を確定する理論を提示した。

リカードにあっては、蓄積動機たる利潤率は市場で平均化され、一般的利潤率が成立するメカニズムが資本の流出入から説かれた。ここで、各産業はただ等しい利潤率を成立させるものとして同等の扱いを受けることになった。

しかし、リカードはスミスから分業論を受け継ぎ、資本蓄積が一定の高さに達すれば、その

段階ごとに資本の再編＝社会的分業の起こることを見て取っていた。その社会的分業はスミスが言うように、工業でより有利に行われるのであり、農業ではその性質上、分業があまり進まないことは自明のことであった。それゆえ、社会的分業は工業でより多く進展し、とりわけ生産財産を独立させていくのであった。こうして、社会的分業によって、社会的生産力が全般的に上昇を見るのであった。

ここで、リカードは資本主義社会が近代工業化社会としての方向性を持つことを明らかにした。「大製造業国は…大資本が機械に投下されている富裕で強力な国」なのであった。こうしてリカードはスミスの分業論と資本蓄積論とを批判的に摂取しダイナミックに統合し、資本主義社会の未来像を示した。資本主義社会の未来は、富源の終焉という資本蓄積がやみ、それゆえ社会的分業という資本の再編を生みえなくなる定常状態までは、工業化社会という方向性を示し、社会的分業にもとづく社会的生産力の全般的改善のため、労働者階級の消費生活を著しく改善するのであった。

(注)

- (1) 中村廣治, 1975年, 『リカード体系』ミネルヴァ書房, 1.
- (2) 羽鳥卓也, 1972年, 『古典派経済学の基本問題』未来社, 245.
- (3) Ricardo, D. 1821年, 『経済学および課税の原理』([*On the Principles of Political Economy, and Taxation*]) 以下単に『原理』と略記。リカードからの引用はすべてスラッファ編『リカード全集』([*The Works and Correspondence of David Ricardo, ed. by P. Sraffa*]) による。本文中の関連箇所末尾にローマ数字で所在の巻、アラビア数字で当該ページを付記する。なお、邦訳には対応する原典ページが付されているので、併記を省略する。) I, p.95.
- (4) Ibid. pp.131-132.
- (5) Ibid. p.279.
- (6) Ibid. pp.100-101.
- (7) Ibid. p.279.
- (8) Smith, A. 1776年, 『国富論』([*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*], Cannan ed., 6th. London, 1950. [大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫 1959年]) スミスからの引用は、本文中の関連箇所末尾にローマ数字で所在の巻、アラビア数字で当該ページを付記する。なお、邦訳には対応する原典ページが付されているので、併記を省略する) I, p.5.
- (9) Ibid. p.9.
- (10) Ricardo. I, p.23.
- (11) Ricardo. IX, p.2.
- (12) Ricardo. I, p.24.
- (13) Ibid. p.24.
- (14) Ibid. p.292.

(15) Ibid, p.265.

(16) 羽鳥卓也、前掲書、序論ならびに第一章参照.